

2015年2月1日 主日礼拝  
説教「子どもたちのように」  
マタイの福音書18章1-5節

【詰め寄る弟子たち】

今日の箇所は、17章の宮への納入金のできごとが続くところ。主イエスに言われて、ペテロが湖に行って釣りをすると、スタテルというコインが見つかりました。これは、主イエスとペテロの宮への納入金でした。けれどもそのとき、それを見ていた他の弟子たちのうちに、ひっかかるものがありました。

弟子たちは、だれがいちばん偉いかとしょっちゅう争っていました。彼らは、「また、ペテロか!」と、苦々しい思いにとらわれました。ペテロをねたましく思ったのです。だから主イエスに詰め寄って、「それでは、天の御国では、だれが一番偉いのでしょうか」(1)と怒って訊いたのです。こういうことは、私たちにもあることです。どうしてあの人だけが……。あの人と、自分といったいどこがちがうのか……。そのように、ねたむ思いと怒りがこみあげることがあります。

【幼子のように】

そのとき、主イエスは、「小さい子どもを呼び寄せ、彼らの真ん中に立たせ」(2)しました。このころの子どもたちというのは、今ほど大切にされていませんでした。この子どもも、ただ呼ばれたから、そこにいます。自分が主イエス

のみ前にいるのがふさわしいとか、主の前にいる資格があるなどとはちっとも思っていないのです。

天国はそういう人々がいるところ。私たちもみな、自分が罪人であることをよく知っています。そんな私たちを、神さまがあわれに思って、御子イエスを十字架につけてくださいました。このことがわかると、「天の御国では、だれが一番偉いのでしょうか」(1)という弟子たちの質問の答は、「天の御国ではだれも偉い人などいない」であることがわかります。

私たちは、他のだれかよりも偉くなりたいとは思わないかもしれませんが、でも、他のだれかよりも低く扱われたくない、という思いがあります。特に、自分に自信がないとそのようになります。自信がないから他の人と比べ、自分が



優っていることを確認して、安心しようとしています。人からの評価によって、自信をつけようとするのです。でも、それは、ねたみを生み、怒りを生むだけです。そして、傷つくばかりなのです。主イエスの与えてくださるのは、もっとはるかにすばらしいものです。

それは、主イエスに受け入れられていること

を喜ぶ生き方。主イエスに呼ばれた子どもであることを心から喜ぶ生き方。自分だけではなく。兄弟姉妹も、主イエスに受け入れられたことを喜ぶ生き方です。そして、たがいを受け入れ合う生き方。私たちはおたがいにこう言うことができます。「私はあなたを、心から喜んでいきます。あなたが、主イエスのいのちに与っていることをほんとうに、喜んでいきます。私も、あなたも、よかった、ほんとうに」と。

【何度でも、何度でも】

この箇所が続いて、「わたしを信じるこの小さい者たちのひとりにでもつまずきを与えるような者は、大きい石臼を首にかけられて、湖の深みでおぼれ死んだほうがましです」(6)とあります。では私たちは、裁かれてしまうのでしょうか。もちろん、そうではありません。

私たちは、いつも神さまのまなざしの中にいます。ねたむ私、怒る私、つまずかせる私。その私から、神さまのまなざしは、それることがありません。だから、私たちは、何度でもやり直すことができるのです。「あなたがたも悔い改めて子どもたちのようにならない限り、決して天の御国には、入れません」(3)は、約束のことばでもあります。何度でも、悔い改めたらよい。何度でも、何度でも、何度でも。神さまはもうこれまで、とは決しておっしゃらないからです。神さまのまなざしの中で、何度でも幼な子であることに戻ればよいのです。